

世田谷区立給田小学校 学校運営委員会通信

平成22度 第8号
平成23年1月17日
世田谷区立給田小学校
学校運営委員会
委員長 井上健

地域に根ざした学校づくり 地域・学校・保護者の連携と協働を深める

議題

- 1 学校長より
 - ・11月職員会議について
 - ・三重県加太小の来校
 - ・世田谷9年教育の動き
- 2 委員より
 - ・通信7号の概要と8号の内容の検討
- 3 井上委員長より
 - ・福岡県春日町・那珂川町・筑前町におけるコミュニティ・スクールの取り組み

出席者 井上・清水・岡本・竹越・若林・多田・土橋・安斎・鈴木

12月9日、校長室において第8回学校運営委員会が行われました。

最初に土橋校長より、11月19・20日に行われた学芸会の様子、11月の職員会議の内容、三重県の加太小から視察を受けたこと(詳細は2ページ)について話がありました。

次に、「世田谷9年教育」についての説明がありました。学舎(グループ)ごとに教育目標や教育計画を定めること、学習確認調査を実施すること、教職員の連絡会をつくり効率的に運営すること、などの基本方針に対して、委員からは「給田小は2つの学舎に関わるが、連携はうまくいくのか」、「給田小が大事にしてきたものが失われてしまつのではないか」との疑問が出されました。校長からは「小学校の教員が、

義務教育の9年間を見据えながら教育をすることは子どもにとっては大きなプラス。給田小の伝統を大事にしながら、子どもや教職員に負担のない教育課程を編成したい。世田谷区がどのような学校づくりをしていこうとしているのか、保護者に情報提供することが大切」との話がありました。

その他には、「単P研修会の案内が中学校からも届くようになり、PTAも小中で連携しようとしている」との報告がありました。

委員からは、学校運営委員会通信7号の報告と8号の予定、もちつき会の報告(詳細は4ページ)がありました。

また、井上委員長からは、講演で訪れた福岡県春日町・那珂川町・筑前町におけるコミュニティ・スクールの取り組みについてお話がありました。

おいしい野菜は大切に育てられているんだなあ！



12月1日・浅野泰三さんの畑
大きな大根を抱えて嬉しそう！
2年生の収穫体験

皆さんは「ゲストティーチャー」という取組みをご存知ですか？

学校からの依頼に応え、保護者・地域の方が職業や特技を活かして、教壇に立ちたり、授業のお手伝いをしたりすることです。11月26日に実施された2年生の食育の授業のテーマは、「給田でとれる野菜を知ろう!」でした。この日のゲストティーチャーは、中央高速近くで農業を営んでいらつしやる浅野泰三さんと、給田小の保護者でもあります。

「野菜を作るには、いい土が必要。野菜には収穫の時期があり、それが一番美味い時で旬と言います。うちの畑でとれた野菜は皆の給食にも使われているんだよ。」浅野さんの話を聞きながら、子どもたちは、畑からとれたばかりの人参やネギをさわったり、初めて見る大根やキャベツの種に目を丸くしたりしながら、野菜への興味を広げていました。

この日の授業をふまえ、12月1日、浅野さんの畑で収穫体験が行われました。子どもたちは、中央高速わきの広々とした畑に歓声を上げながら入っていき、一人一人、力を込めて大根を引き抜きました。自分で収穫した大根はお土産にいただき、「今日はこれでおでんを作つて

(2年生の感想文より)

もらった「この大根 赤ちゃんみたい」と大事そうに抱えながら、学校へ帰る姿が見られました。

実は、こうした学習には以前から、地域の方々のご協力をいただいています。甲州街道と遊歩道に面した畑で農業を営む杉田雅重さんもそんな協力者のお一人です。杉田さんの畑には、12月7日に3年生が体験学習に訪れました。

浅野さん、杉田さんには、野菜をすべて無償で提供していただいています。恐縮する校長先生に、「畑に来て収穫を体験した子どもは、野菜を残さなくなつたり、好きになつてくれるでしょう。そして、畑を荒らさなくなります。それでいいんです」と浅野さん。その想いはしっかりと子どもたちに届いたようです。

地域運営学校になつてから、ゲストティーチャーの活動もより活発になつています。地域の方にとっては、子どもたちと触れあう機会が増え、給田小学校をより近い存在に感じていただけると同時に、子どもたちにも、保護者以外の大人と触れあい、住んでいる町のことを知るとても良い機会となつています。

(関連記事が3ページにあります)



12月7日・杉田雅重さんの畑
並んで上手に抜けるかな！
3年生の収穫体験

かぶと 加太小の視察を受けて

「コミュニティ・スクール推進協議会(滋賀大会)」での発表がきっかけとなって、11月18日(木)、三重県亀山市立加太小^{かぶと}学校の学校運営協議会委員の方々の訪問を受けました。

古民家や千蔵民俗資料館など、学校内の施設や子どもたちの様子を視察後、井上委員長から、学校運営委員会の今までの活動と成果を説明し、意見交換をしました。

加太小は、CS(コミュニティ・スクール)指定1年目で児童数55名の小規模校です。指定前から稲刈りやキャンプ、イルミネーションづくり等で地域との結びつきが強い学校だそうぞうです。

加太小の櫻井校長からは

「給田小もCSのスタート時は『CSや委員会がどのようなものなのか?何をしたらよいのかわからなかった』というお話を聞き、現在の加太小と同じような状況にあったことを知り、少し安心しました。指定を受けてから組織的なものや活動の形ばかりに目がいってしまい、焦っていたのも事実です。加太小にはどんな特色があり、何をめざしていくのか、などを議論していくうちに新しい姿が見えてくるように感じました。(中略)」



加太小の委員の方々と意見交換の様子を写した写真

今回、視察を受ける立場となることで、改めて、給田小のCSが注目されることの喜びや緊張感とともに、次のような2つの課題がつきばりになってきました。

他校から見た給田小の特色は、私たちがCSとしてのビジョンを定め、ビジョンに即した活動を積み重ねてきたことにあります。それが、この4年間の成果であることには確かなのですが、CSとしてさらに前進していくためには、ビジョンが意味するところをもっと多くの保護者、地域の方たち、教職員、そして、子どもたちと共有していなくてはなりません。それが第1の課題です。

第2の課題は、具体的な活動を支える組織づくりです。学校運営委員会では、「給田小はCSとなることで何が変わるのか」「既に行っているさまざまな活動の意味」を考えることを重視してきたため、敢えて、新しい組織はつくらずに活動を進めてきました。しかしながら、4年目を迎えて、特定の人に負担をかけ過ぎないで、活動を継続するためにはどうすればよいのか、という問題に直面しています。

加太小と給田小、学校の規模や伝統、地域の特性などに違いはあっても、CSとして学校・家庭・地域の連携を深め、よりよい学校、よりよい地域をめざしていることは共通しています。



屋上で記念撮影した給田小の訪問者たちと加太小の関係者たち

Q 現在は、全国のコミュニティ・スクール(以下、CS)の状況について、お聞きしました。現在、CSは全国で何校くらいあるのですか?

平成22年4月1日現在で、629校がCS指定されています。そのうち小中学校は428校、中学校が157校です。公立の小中学校は約2万校、中学校は約1万校あるので、全国におけるCSの指定状況は2%程度と言えますね。世田谷の区立小・中学校はその4割がCSですが、他の自治体では、小中学校をすべてCSにしたところもあれば、まだ1校もないところもあります。

Q 他の地域のCSは、どんな感じなのでしょう? 参考にできる事例があれば、教えてください。

昨年11月に、福岡県S市のCSを視察する機会がありました。興味深かったのは、その小学校では、「学校・家庭・地域の役割分担」という考え方に立ち、既存の組織(校務分掌、PTA、自治会など)をつまみ活用して、それぞれが主体となって、CSとしてのプロジェクトを進めていたことです。

プロジェクト(以下、Pと表記)は学校・家庭・地域ごとに7つあり、例えば、「学校のP1」は「生活指導の機能を活かした授業をつくる」で教職員の研究推進委員会(校務分掌)が実施。「家庭のP1」は「家族の一員として働く場」をつくる。PTAはヘルマーク委員が担当。「地域のP1」は「地域の中に子どもの遊び場をつくる」で4つの自治会が地域ごとに取り組んでいました。

教えて! 井上先生



Q CSがゼロの地域では、なぜ、広まらないのですか?

どうしてでしょうか(笑)。いろんな事情・理由があると思いますが、学校運営委員会に法的な権限(学校経営方針を承認すること、人事に関する意見を言えること)があることがCS化を躊躇させるのかもしれない。

ただ、子どもを取り巻く環境は大きく変化しており、学校だけで問題を解決するのが難しいことは、多くの人が認めることです。文科省も、CSと別に、平成20年度から3年間の予定で「学校支援地域本部事業」をスタートし、平成22年4月現在、全国で1011市町に2528本部が設置され、小学校5876校、中学校2631校で活動が行われています(『文部科学時報』平成22年8月号)。CSはゼロでも、こちらの活動には積極的な自治体も見られます。

この学校支援地域本部は、「学校の教育活動を支援するため、地域住民の学校支援ボランティアなどへの参加をコーディネートするもので、いわば、地域につくられた学校の応援団」(文部科学省ウェブ・サイトより)で、世田谷の「学校協議会」に相当する取り組みです。学校運営委員会よりいっしょな意味でハードルが低く、国が助成もしてくるので、「これならできる」という気持ちを起こさせるのではないのでしょうか。いずれにしても、今、全国各地で「地域に根ざした学校づくり」が進められていることは確かです。全国の優れた活動を参考にしながら、私たちらしく、連携・協働を深めていきたいと思います。

何でもよく食べ 元気な給食小の子たち



地産地消を心がけていらっしゃる、給食小4年目の栄養士の南香織先生にお話をうかがいました。



南香織先生
海外旅行が大好き！特に好きなのは韓国。愛犬とは韓国語で話します。料理上手な南先生、得意料理はチヂミ。

Q. 地元の野菜を使つよつになつたのはいつごろからですか？

今から約3年前です。前PTA会長がパイプ役をしてくださいました。学校の周りにたくさん畑があるのを見て、「この地域の野菜を使つて給食を作りたい」という私のつぶやきを覚えていらした校長先生に後押しをしていただき、実現しました。学校給食の食材というと、量が多いため敬遠される農家さんも多い中、お引き受けいただけただけは、本当に恵まれていると思います。野菜に限らず、地産地消を心がけ、魚も八丈島のものを使つたりしています。

Q. 子どもたちの反応はいかがですか？

普段は地元の野菜を使っているアナウンスしても野菜の食べ方に違いはありませんが、ゲストティーチャーをお迎えして授業を行うと、いつもは残る野菜が一番早く無くなるようになつたりします。

今回の「食育」の授業は、昨年世田谷区の教育研究会で研究授業を行い、今年も、浅野さんにゲストティーチャーと大根の収穫体験をお願いしたところ、快諾頂き、実現しました。子どもたちは、自分が食べている野菜の作り手の顔が見えると、いつもは残す野菜も頑張つて食べるようになり、後日、担任の先生からの話では、浅野さんの畑の横を通る子はお仕事中の浅野さんに挨拶をするようになり、「今日の給食にうちの がでるよ」と教えてもらっているようです。授業を通して地域の方と子どもたちとの関係ができたことも嬉しいですね。

Q. 給食小の給食は他校と比べてどうですか？

給食以外でも地元の野菜を使っている学校はたくさんありますが、使いたくても学校の周りに畑がないという所もあります。また、他校の栄養士と話をする、給食小の子どもたちがとてもよく食べることがわか



11月26日 2年生の「給食のやさいをしろう」の授業
右・ゲストティーチャーの浅野三さん
左・栄養士の南香織先生

ります。特に、「飯の消費量はかなり違つよつです。また、不思議なもので、毎年お正月明けにはたくさん食べるようになり、お正月にみんな、ごちそうをたくさん食べ、胃が大きなのでしょつか(笑)。

Q. 最後に、先生から保護者にお願ひしたいことはありますか？

食べて欲しいという思いから、ついつい子どもの嫌いな物や食べない物は食卓から消えがちですが、たとえ食べなくても食卓には並べて欲しいと思います。こんな食べ物があんだ、と目にするのが大切なんです。知らなければ口にしません、知つていればいつか食べる日がくると思います。子どもは自分が作ったものは食べたりしますから、一緒に買い物をして、料理をするのもいいかもしれませんね。

子どもたちにたくさん食べてもらいたいという思いで、毎日の献立を作つてくださっている南先生。「地域運営学校でなければできないことも多い」とおっしゃる南先生は、子どもの苦手な野菜も、地域の野菜を使つたり、地域の方による食育の授業で好きになるように考えてくださっています。毎日、思いのこもつたおいしい給食を食べている給食小の子どもたちは幸せだと思ひました。
(学校運営委員)

食育の授業・2年生の感想から

- ・ほくは、今日のおはなしを聞いて、やさいを食べると、かぜをひかないことや、おはだかツルツルになることや、おなかガスツキリすることなどがわかつてよかったです。
 - ・あさのさんがどのようにやさいがそだつのか？とかいろいろおしえてくれたから、やさいのたねのことも、だいこんや、にんじんのことも、さわつたかんじもよくわかつた。
 - ・やさいが、いいはたらきをしてくれるから、やさいをたくさんたべたくなりました。ピーマンがきらいだけど、がんばつてたべたいです。とっても楽しかつたです。
 - ・だいこんや、にんじんのたねの大きさがわかりました。いろいろな形がありました。まるいのやひらべつたいのもありました。
 - ・人参の葉っぱがすごく長かつた。大根も食べるころが長かつた。長ネギも、スーパーで買う時よりも少し長かつた。
- 子ども感想を読んで、保護者からひびく**
- ・日頃から野菜は好きでよく食べていますが、野菜を作っている人に会い、お話をうかがつたり、野菜の働きを詳しく知ることができ、より野菜を好きになつてくれればいいなと思ひます。
 - ・夏休みのトマト以来、なにかと野菜作りに関わる機会があつたので、今回の浅野さんのお話にはとても興味を持ってたようです。これからもこのような機会があることをうれしく思ひます。
 - ・いつも浅野さんが畑の手入れや収穫をしている姿を見ています。その姿から、浅野さんがどれほどの愛情を込めて野菜を育てていらつしやるのかが伝わってきます。この畑でとれる野菜は本当に甘くて美味しいですね。

千歳民俗資料保存会

もちつき



チーム・給田小先生+日本女子体育大



チーム・お父さんの会「YAMATO」

晴天に恵まれた12月4日、給田小の校庭で「もちつき会」が開催されました。

伝統の「かけつき」を次の世代に引き継ぎたい、つきたてのお餅を給田小の子どもたちに食べさせたいという保存会の願いが、PTAの皆様、給田小を支えるお父さんの会「YAMATO」の皆様、教職員の皆様、そして遊び場開放委員会の協力で叶いました。

当日は50名を超える児童、保護者、地域の皆様が来校し大盛況でした。4人のつき手が息を合わせて蒸しあげたもち米をこね、それから順番に餅をつき始めると、観衆から「わあ!」と歓声が上が



チーム・程原さん+給田小先生



校長先生による仕上げの「あげつき」

り、リズムカルに徐々に餅をつくスピードがあがってくると「はい!はい!」というかけ声に変わりました。



ランチルームでのお母さんたち

つきあがったお餅は、ランチルームで、保存会の女性陣の指導のもと、PTAのお母さんたちによって、きなこ餅と磯辺巻きになり、校庭で待つ子どもたちに運ばれました。(鳥山ブレイクパークから手伝いに来ていただいた元給田小PTAのお母さんたちの慣れた「もちちぎり」も見事でした。)



古民家でホッと一息!

「もちつき」が終わり、つき手の皆さんも、古民家でお餅を食べながら、ひと休み。もちつき談義に花が咲きました。地域・保護者・先生方が一体となりお餅をつき、皆で一緒に食べ、まさに「私たちの子ども」の学校」を実感した一日でした。

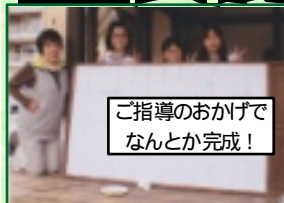
今月のわんこ 第6号



ボール遊びとフリスビーが大好き、犬の8才は人間でいう約50才。おじさん犬ですが毎日元気に走り回っています。

戸田ピッケくん
8才・オス
キャバリア・キングチャールズ
スパニエル

古民家大掃除・障子の張り替え



師走に入り一番の寒さとなった12月16日、古民家の大掃除が、千歳民俗資料保存会、せたがや創造塾の皆様と6年生によって行われました。この日は、あわせて、障子の張り替えもしました。子どもたちは、刷毛で糊を棧に塗るのも初めてなら、カミソリを使うのも初めて。指導する保存会の皆さんもハラハラ。でも、心配をよそに次々と障子張りが完成していきま



お手伝いしてくれた6年生の皆さん

「初めてやって難しかったけど、楽しかった。」張り終えた障子を見て満足そうな6年生でした。地域運営学校になって4年目、少しずつですが、地域の皆さんに学校へ足を運んでいただく機会が増えてきました。

実際にやってみると 真剣に話を聞いて

あとがき
新年、おめでとございます。地域運営学校としてのビジョンのひとつに、給田小学校の保護者・地域住民は、学校のために、自分ができることをする機会が増える。
「私の子どもの学校」から「私たちの子ども」の学校」として考えることができるようになる。とあります。
子どもが給田小学校を卒業して、2回目の新年を迎えた今、この言葉の意味がより深く理解できるようになりました。
子どもが卒業すると急に、学校との距離が遠くなりがちですが、それの良いのでしょうか。
この地域を、子どもたちにとって、より住みやすく、健やかに成長できる地域とするためには、子どもが学校を卒業しても、地域の住民として、子どもたちを見守り、時には注意をするなど、関心を失わないことが重要だと思います。
忙しい日常の中で、心に余裕を持つことは難しいと感じていますが、子どもたちの笑顔のため、また、自分自身が住む地域のためにも、少し「ゆとり」を持って、□うるさい近所の「おじさん」として、地域と繋がってほしいものです。
学校運営委員会 委員
竹越 学

